



館長だより

山形県産業科学館

令和8年1月15日(木)

発行 館長 加藤智一

波の花

「波の花」

歌:田中瑞穂

岬まわれば 眼の下に
拡がる冬の 日本海
身を切る海風の冷たさが
心細さを 濡らします

すがることも追うことも 許されず
ひとり去ってゆく 恋ですか
みれん引きずる 女のよう
岩に碎け 風にころがる 波の花

冬の日本海、季節風が海面を強烈に吹き付け、波が碎け散るたびに泡が細かくちぎれ、空気を含んだ軽い塊となって海岸へ吹き寄せられます。これが、あの綿のような姿、「波の花」となるわけです。ただし、泡が海面に浮かぶだけでは波の花にはなりません。「波の花」は、海水中の有機物が、冬の強風と荒波によって激しく搅拌されることで生まれます。石けん水をシャカシャカ泡立てると泡が立つのと同じように、海水に含まれる「界面活性剤のような成分」(海洋に生息するプランクトンやバクテリアなどの微生物がつくるタンパク質・脂質・多糖類などの高分子有機物(天然界面活性物質))によって生み出されます。つまり「波の花」は、「冬の海の荒々しさ」と「海の生態系の豊かさ」がそろって初めて咲く花と言えるのです。

初めて見る人は「海が汚れているのでは」と心配することもあるでしょう。しかし、「波の花」の主成分は、以上に示したように自然由来の有機物であり、人工的な汚染とは無関係です。ただし、海水中の有機物が多いほど発生しやすいため、河川からの栄養塩の流入や沿岸の海藻の繁茂、プランクトンの増殖など、海の栄養が豊富な地域ほどよく見られる現象でもあります。つまり「波の花」は、海が豊かである証でもあるのです。

「波の花」が、特に冬に多い理由は三つあります。一つは、季節風の影響です。季節風が強い日本海側の冬は、シベリアからの冷たい季節風が吹き荒れ、波が高くなりがちです。また、海水温が下がるため、粘性が上がり、泡が壊れにくくなります。さらに、

秋に増殖した植物プランクトンが冬にかけて分解され、有機物が多くなる時期でもあります。この三つが重なることで、冬の海岸は「花盛り」になるという説です。

「波の花」は、沿岸の暮らしにも密接に関わっています。北陸や山陰では、冬の訪れを告げる風景として親しまれており、石川県の公式観光サイトでは、「波の花」を「能登の冬の風物詩」として紹介し、観光スポットとして案内しています。また地元のニュースでも「今年も波の花が舞いました」と季節の話題として取り上げられ、観光客が写真を撮りに訪れることがあります。しかし、生活者にとってはむしろ厄介者。強風の日には、「波の花」が道路や家の壁にまで吹き付けられ、乾くと白い跡が残ります。自然由来の成分とはいえ、海水の塩分も含むため、車や建物の金属部分には錆の原因になります。

話は少しずれますが、台湾から山形を訪れる観光客が、山形駅西口の広場で雪だるまを作ったり、大の字に寝転んで写真を撮ったりしているのを見かけると、何が観光資源になるかは、外からいらした方々にしか分からない魅力があるのだろうなと考えさせられます。SNS全盛の時代、どこからバズり出すか見当もつきません。地元の人間は唯々黙々と、眞面目に普段の生活を続けるのみです。



今日は何の日 1月11日は「塩の日」です

塩の日は、1569年に上杉謙信が敵対していた武田信玄に「塩を送る」という有名な逸話にちなんで制定された記念日です。塩は人間の生活に欠かせないものであり、古来から「清め」や「長寿」の象徴でもあります。お相撲の土俵に塩をまく習慣や、葬儀の帰りに清めの塩を使う文化もその一例です。